



## 高等教育機関における学術情報基盤計画

前田 博<sup>1</sup>

平成 18 年 3 月に、科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会の学術情報基盤作業部会から、「学術情報基盤の今後の在り方について」と題する報告書 [1] が出されました。高等教育機関を取り巻く急激な環境変化、すなわち「少子化の進行」、「国際化の進展」、「情報通信技術 (ICT) の発達」、さらに国立大学法人においては「財政の緊縮化」、のなかで、学術研究のインフラである学術情報基盤整備の今後の方向性を提言したものです。ここでいう学術情報基盤は、コンピュータやネットワークといった物理的インフラとその上で流通するコンテンツを一体のものとして指し示しています。主な提言を列挙すれば

1. 国立情報学研究所を中心として検討されている「最先端学術情報基盤構想 (サイバーサイエンスインフラストラクチャー構想)」の実現とそれによって得られる成果の社会への還元
2. 大学等における情報戦略に基づく学術情報基盤としてのコンピュータ・ネットワークの整備、高速化およびその基盤組織であるセンター等の役割・使命の明確な位置付け
3. 情報セキュリティの確保とそれを担う人材の育成
4. コンテンツ供給主体である大学図書館が教育研究活動を支える重要な学術情報基盤であるとの明確な位置付け
5. 学術情報の電子化およびその確実な保存、アクセス環境の確保や機関リポジトリによる知的創造物の積極的な発信など電子化への積極的な対応

ということになります。

もう一方で、このような高等教育機関を取り巻く急激な環境変化は、国立大学の法人化を機に国公立大学を問わず、各大学の「生き残り戦略」の展開を推し進めています [2]。特に、財政基盤の大きい私立大学では、大規模な ICT 投資により、教育研究の質の向上や学生や教職員への新たな高度情報サービスの提供を一つの生き残り戦略として大きく打ち出しています。大規模な国立大学においても、同様な模索が始まっているところです。

本学の学術情報基盤は、その物理的インフラについては情報科学センターを中心に、時代を先取りした先駆的といえる情報化が推進されてきたといっても良いでしょう。しかしながら、そのインフラの上で稼動する各種情報システムや学術コンテンツは個別に計画整備され、学術情報基盤全体としては、有機的かつ効率的なシステムとはなっていません。また、そのセキュリティ確保も十分とは言えません。

<sup>1</sup>九州工業大学 副学長 (情報・図書館担当) hmaeda@ecs.kyutech.ac.jp

## 巻頭言

このような背景から、本学においても学術情報基盤の総合的な整備計画を立案する必要性が認識され、平成 18 年 11 月の全学情報化推進委員会において、6 年程度の中期的な総合情報基盤計画策定プロジェクトが発足しました。ここで、総合情報基盤となったのは、学術情報基盤に加えて教務情報システムなどの業務系情報システムも視野に入れようとの意味からです。この計画を策定するに当たっては、達成すべき大目標を明確にする必要があり、例えば、

1. 教育・研究環境の充実や革新に寄与すること
2. 安全で便利な情報基盤の提供
3. 経営の効率化に寄与すること

などを挙げることができます。さらに、この大目標は学生、教員、事務職員など対象者によって内容が異なるという複雑性も有します。予算が潤沢にあれば、全ての目標をカバーする計画案も可能ではありますが、制約された予算上では、優先的な目標を定め実現可能な計画案を策定するという考え方が必要になります。ともあれ、本学の特徴や規模に見合った総合情報基盤計画案が策定され、大学の教育研究活動の充実に寄与することが期待されています。

## 参考文献

- [1] 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会，学術情報基盤の今後の在り方について（報告），平成 18 年 3 月
- [2] 大学 CIO フォーラム「大学革新のための IT 戦略」提言書，平成 18 年 6 月